

「どんなふうに働いて、生きてゆくの?」と、尋ねてみたい。またその応答をほかの人たちとも分かち合つてみたいと、心から思う9人にインタビューを申し込みました。

彼らにお願いしたのは、『仕事や働き方について「論」ではなく、自分はどうやつてきたか、何を大切にしているのかを聞かせてください』ということです。

そうしたらみんな、本当に正直に、自分と自分の仕事のことを語つてくれました。

本人が本人の話をただ淡淡と打ち明けてくれることが、なぜこんなにありがたく、力になる感じがするんだろう。「仕事」や「働き方」、あるいは生き方にについて、何か教えてあげようという姿勢の人はいかつたと思います。「自分はこう考えていて」と伝えてくれる人はいたけど、少なくとも悩んでいる人を助けようとか、救おうとか、楽に

してあげようといった意図をお持ちの方は、一人もいなかつたと思う。

この本は全三冊予定の二冊目で、前著のあとがきに、寺山修司さんの『ポケットに名言を』にあつたこんな言葉を載せました。

「どうか僕を幸福にしようとして下さい。それは僕に任せてください」 アンドレ・レニエ

「生まれてきた良かつた」と思える人生にしたい。でも僕にとつてそれは、欲しいものが買えるとか、何でも選べるとか、楽をして生きてゆけることではないです。「生きているなあ」と感じられる瞬間を、少しでも多く感じてゆきたいだけのことであつて。

戸惑いが逡巡に見えたり、わからなさが悩みのように映ることもあるかもしれないけど、この生涯で体験したいのは、他でもない自分の人生です。それがどんなに良さそうに見えても、他人の人生を生きたいわけじやないし、悟りをひらきたいわけでもない。

『自分の仕事を考える3日間I』
弘文堂（2009年12月刊行）



『ポケットに名言を』(角川文庫)

歌謡曲や映画の名セリフも含む無数の言葉を編纂した箴言集。アンドレ・

レニエ（アンリ・ド・レニエ／Henri de Régnier）はフランスの詩人・小説家。
1936年没。

だからきれいな言葉で気持ち良くなり、よく出来た思考方法で整理してスッキリさせて、むしろ“生きている手応え”から本人を引き離してしまうような働きかけについては、僕はちょっと遠慮したい。自己啓発とは、自分が自分で取り組むものであって、他人から促される類のことではないと思うんです。

でも、同じ時代を生きている他の人たちが、どんなことを感じたり考えながら、働いて、生きているのかは聞いてみたい。どんなしんどさや、どんな嬉しさとともにいるのか。そしてその言葉に触れた時、自分の中から浮かび上がってくるものを識りたい。またそれによつて照らし出されるものを、よく見てみたい。

立ち入った話になるかもしれないのに、聴く側としての覚悟は要ると思うけど。

やりたいのに出来ていないことや、ああ在りたいのにまだそうなれていないことを実現している他人の姿を見ると、私たちは“眩しさ”



自分の仕事を考える3日間
奈良県立図書情報館で、2009年から毎年1月の三連休に開催されてきたフォーラム。参加者は30～40代を中心とし、全国各地から集まる。1回の延べ参加者は約千人。全3回の予定で、最終回は2011年。

を感じます。

その輝きから目を離せなくなる時もあるかもしれない。けど光の方に目を凝らすのではなく、その光で自分を照らして、手元にある自分の仕事や働き方、そして生き方をあらためてよく見てみる。

そんな時間をつくれたら：：と思いながら、奈良の図書館で「自分の仕事を考える3日間」というフォーラムを開き、さらにこの本を書きうとしています。

このまえがきの前の1つのインタビューと、後につづく8つのインタビューは、いわば9つの灯りだなと思います。光源の質も少しずつ違う。側面にも回り込む柔らかい光だったり。陰影をハッキリさせて形を際立たせるコントラストの強い光であったり。奥の方まで届く、真っ直ぐな光だったり。

書きながら、僕もその光に照らされてみようと思います。

三島邦弘さんを自由が丘の一軒家のオフィスに訪ねる

「こんなもんで」と思つたら、「こんなもん」でもいられないと思ひます

三島邦弘さんは大手出版社を経て、2006年に「ミシマ社」といって、小さな出版社を立ち上げた。創業5年目をむかえる2010年秋の社員は、本人を含み8名。スタッフはできるだけ増やさず、小さな会社だから出来る仕事を重ねてゆきたいと言つう。

「ミシマ社は応援したくなる出版社・ナンバーワンだなあ」と思つていたら、ある週刊誌で『息子を入れたい会社・ナンバーワン』に選ばれたと聞いてひどく納得した。ちょっと放つておけないというか、目が離せなくて、気持ちを差し向けてながら見守つている。そんな人が多いんじやないだろうか。

と、先日三島さんに話したら「見守つてます！」という人、本当に

書店におけるミシマ社のフェアの様子。
他の出版社の書籍も、一緒に推して並べていることがある。

69

藝術



ニシマネ

E
藝術

ほしいものは
なんですか?

自由が丘のほがらかな出版社
ニシマネ。

多くて。出来たら本も買って欲しいんですけど（笑）。何度もお手紙をいただいてから、三通目で『ついに本を買いました！』と伝えていただいたこと也有って」と笑っていた。

「法人格」というけれど、会社にも人格があつて、私たちはそこに熱意や品位を感じたり、「あのひと面白い」と言う時と同じように会社という「ひと」を感じ取っている。

初めて友人からミシマ社のことを聞いた時は、「取次を通さずに直販で書店に卸している若い出版社があつてね」という話で、硬直化したトーハン・日販の流通体制に風穴を開ける挑戦的な動き現る！という感じだった。が、彼らの本に付いてくる手書きの読者カードや、三つ折りの通信（同じく手書き）、そして営業チームの日々のブログなどに触れていると、なにかと戦っている気配はあまり感じられない。主義や主張というより、むしろ“人柄”で動いている会社なんじやないかなと思い、俄然ご本人に会つてみたくなつた。

取次
出版界において書籍・雑誌の流通を担う。取次と書店の関係は卸売問屋と小売店の関係に当たり、大小約50社による取次ルートのうち、二大総合取次のトーハンと日本出版販売のシェアが70%を占める。

——何を大切にして働いているんですか？

三島 それ、答えるの難しい。きっと自分の感覚だと思います。直感とか、野生の感覚を大切にしたい。それは会社をつくった時から思つていて、考えずに瞬時に判断して行動していくようでありたいというのだが、何よりも一番にあると思う。

——なぜ、それが大切なんだろう？

三島 野生児でいたいんだと思います。（笑）。

僕は大学を卒業して、最初はPHPという会社に入りました。まず営業の研修を受けて、そのあと編集者になった。子どもの頃から本が大好きで、就職の面接でも「編集者になりたい」と言つていて。「君、編集の仕事をわかつてんの？」って副社長に質問されて、「いやわかつてないです」と答えたのを憶えている。本当にわかつてなかつた。

でも始めてみたらめちゃめちゃ楽しい。文章を読んで、その書き手

PHP研究所
松下幸之助により1946年に創設された出版社。